

時間を祝う劇場住宅
- 「非意味」からそのものを愛でる建築 -

22119021 佐々木 萌絵
指導教員 宮 晶子 教授

時間 余白 人工物
意味 非意味 再意味

1. 制作の背景と目的

久しぶりに会った友人との話に花を咲かせているときや、雄大な自然の中に身を置いているときのように、他者が生きる時間世界と交わることで、現在という一瞬が拡大されるように感じることもある(図 1)。このとき、意味や目的から解放された、時間そのものを祝福できるような感覚がある。その一方で、日常生活の中では、時間に追い立てられたり、時計に自分を無理やり合わせたりすることに苦痛を感じるものがしばしばある。これは、社会生活が人間中心の価値観のもとで作られた「時計の時間」に支配されているためである。

建築や人工物もまた、「時計の時間」と同じように、人間から意味や目的を託されて生まれたものである。けれども、都市の中で意図せず生まれた隙間や、廃墟となった建築物、大量に廃棄されたゴミの山には、自然物に触れたときと同じように、人間中心の「意味」から離れた、人間とは別の時間世界の存在を感じて、解放されたような気分を感じることもある。

本制作では、人間が付与した「意味」を持ちながらも、それから解放された「非意味」の存在として捉え直すことのできる建築を設計する。人間、もの、建築、自然といった、多様な存在が生きる異なる時間世界の重なり合いを作り出すことで、人間が主体的に時間を紡ぎ、「時間を祝う」ことのできる建築を提案する。

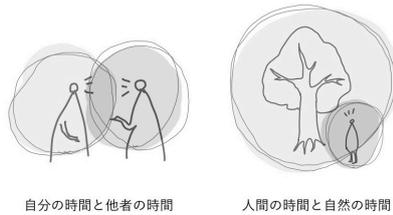


図 1 異なる時間世界が重なるイメージ

2. 「非意味」から「そのものを愛でる」

作家の日野啓三は、著書『都市という新しい自然』※1の中で、都市の中の廃墟や、勝手に成長していくように見える建築群、大量に廃棄されたゴミの山にこそ、人間的な意味から解放されて「宇宙にまで開かれた気分」を感じたと述べている。人工物は人間の意図や目的によって生まれたものであるが、打ち捨てられることによって、それまでの文脈や意味が剥離し、かえってそのもの自体の存在が際立ってくる。この過程は、「意味」を託されて

生まれた人工物が、意図やコントロールから解放された「非意味」の状態を経て、そのものの美しさや価値が再認識される「再意味」のプロセスと言えるのではないかと(図 2)。

このように、建築を「非意味」的な存在として設計し、そのものとして見つめ直すことで、街に溢れる建築や人工物に対しても、人間とは異なる時間世界を生きるものとして再解釈することができる。自らとは別の時間世界に触れたとき、人間は主体的に時間を感じとり、「時間そのものを祝う」ことができるのではないだろうか。



図 2 意味から再意味へのプロセス

3. 非意味的空間の分析

「意味」を持ちながらも、「非意味」的に捉えられる空間について分析を行い、設計手法として取り入れる。

3-1. 意図せず生まれる余白

高架下の空間は、道路を支えるという「意味」を持ちながらも、都市の中に意図せず生まれた「非意味的」な余白である。車や屋台などが置かれた風景(図 3)は、ヒューマンスケールと巨大な橋脚や橋桁のオーバースケールとが対比・強調され、巨大構造物が生きる大きなスケールの時間世界を想起させる。



図 3 高架下の柱と屋台の時間世界を想起させる。

3-2. 「意味」とかたちのずれ

建築の用途が転用されるとき(図 4)、当初付与された「意味」とは別の「意味」が付与されることによって、エレメントや空間のかたちと「意味」との間にずれが生じる。このずれにより、建築の手触りやかたちが際立ち、そ



図 4 倉庫を美術館に転用した例 (BankART Studio NYK)

のものが「非意味」的な存在として浮かび上がる。

3-3. コントロールできないものの貫入

建築物が人間の手を離れ、時間の経過とともに崩壊して廃墟となったとき、植物や外気といった、人間や建築のコントロールを超えたものが貫入してくる。かつて人間的な「意味」で構成されていた内部空間に、「非意味」の存在が入り込むことで、異なる時間世界が重なり合う。

3-4. 「非意味化」する距離

遠くに見えるビルの夜景は、それらの一つ一つに人間の営みや「意味」が存在しているながらも、観測者と対象の間の距離に著しい距離があるために細部を失い、まるで夜空に浮かぶ星々のように抽象化され「非意味」的な見え方をする。距離によって「意味」が希薄になり、光そのものを愛でることができるようになる。

3-5. 時間帯による「非意味化」

日中の住宅街や平日のオフィス街は、人々の生活や活動が溢れ「意味」で充溢した空間である。一方、夜の住宅街や、人通りが少ない休日のオフィス街は、建築物の質感や大きさが際立ち、まるで溪谷を歩いているような感覚を覚えることがある。空間は、時間帯によって「意味」で満たされた状態から人々に使われていない「非意味」の状態に移行することがあり、この対比により、建築や空間そのものを味わう感覚が生まれる。

4. 用途 —意味と意味の組み合わせ

劇場と集合住宅という異なる用途を組み合わせる。劇場は、音の反響や大人数の収容という「意味」によって形が導かれる一方で、住宅は個人の好みや生活の営みという「意味」によって形が作られる。これらの異なる「意味」を持つ建築を融合させることで、互いが別の「意味」を付与し合っただけでなく「意味」との間にずれが生じる。このずれが建築そのものの存在を際立たせ、そのものを愛でることのできる建築空間をつくりだす。さらに、日常生活が営まれる住宅と、ドラマチックな劇場の時間が重なり合うことで、日常の一瞬一瞬を「時間を祝う」劇的なシーンとして再発見することを目指す。

5. 対象敷地

敷地は東京都世田谷区の下北沢駅より徒歩8分ほどの場所に位置する、閑静な住宅街である(図5)。下北沢は、個人経営の商店や小劇場、ライブハウスなどが多く集まる。計画的に整備



図5 対象敷地

されてきたというよりも、住人や訪れる人々の活動が影響を与えながら、緩やかに変化を続けてきた街である。入り組んだ細い路地を目的なく歩きながら生まれる偶然の出会いの中で、他者の時間世界と交わり、「時間を祝う」瞬間が多く生まれている街であると考えられる。

6. 設計手法

6-1. 「舞台の時間」と「生活の時間」を重ねる

劇場の大きなカーブの屋根や壁が住宅の部屋の一部となり、自室の中に劇場の壮大で非日常的な時間が流れ込んでくる空間を生み出す。劇場の要素と、住居という日常的な機能の間にずれが生じ、壁のカーブ

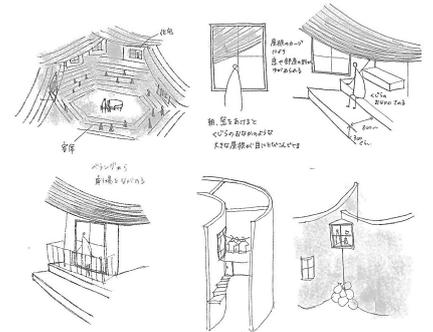


図6 空間イメージのスケッチ

やその重みのある質感を強調する。また、住宅街の中で異質な大きな曲面の外壁には、小さな出窓、ベランダ、階段といった、生活の痕跡が滲み出す要素を組み込むことで、劇場と住宅の異なる時間世界を重ね合わせる(図6)。

6-2. 「非意味」の隙間に棲みつく

防音のための二重の壁の隙間や、階段状の客席の裏側など、劇場の機能を成り立たせるための構造物の隙間や余白に居室を設ける。また、周辺の道や住宅街の住戸同士の隙間と連続した、壁が作り出す隙間の先に、劇場の客席の下の空間が現れる構成とする。普段は意識されないような隙間や小道の先に、非日常の空間が広がっているという建築体験を通して、街に潜む「非意味」的な隙間空間への想像を膨らませることを目指す。

6-3. 「非意味化」する家の灯り

劇場の中には住宅の窓が現れ、その灯りが劇場の照明の一部となる。通常の劇場照明とは異なり、住人の生活によって偶発的に生まれる、コントロールできない「非意味」的な灯りである。また、劇場の中に生活の灯りが存在することで、舞台上で起こる出来事が日常生活の延長線上にあることを意識させ、日常生活の中にも劇的な瞬間が溢れているということを体感できる空間を目指す。

主要参考文献

- ※1 『都市という新しい自然』日野啓三 1998 読売新聞社
- ・『時間の中の都市』ケヴィン・リンチ 1974 鹿島出版会
- ・『時間についての十二章』内山節 1993 農山漁村文化協